

——『異界』。

ここではないいずこか、此岸しがんに対する彼岸ひがん、この世から見たあの世、もしくは、いくつも存在し得るといわれる並行世界。それが「発見」されたのはそう最近のことではない。昔から「神隠し」と呼ばれる現象は存在しており、それが『異界』への扉をくぐる行為だということは一部の人間の間では常識とされていた。

だが、『異界』が我々を招くことはあれど、『異界』に対してこちらからアプローチする手段は長らく謎に包まれていた。

そのアプローチを、ごく限定的ながらも可能としたのが我々のプロジェクトだ。人間の意識をこの世界に近い『異界』と接続し、その中に『潜航』する技術を手にした我々は、『異界』の探査を開始した。

もちろん『異界』では何が起るかわからない。向こう

側で理不尽な死を迎える可能性も零とは言えない。故に、接続者のサンプルとして秘密裏に選ばれたのが、刑の執行を待つ死刑囚Xであった。

彼は詳細をほとんど聞くこともなく、我々のプロジェクトへの参加を承諾した。その心理は私にはわからないが、Xは問題なく『異界』の探査をこなしている。

寝台に横たわる肉体を残して、Xの意識は『異界』に『潜航』する。Xの視覚は私の前にあるディスプレイに、聴覚は横に設置されたスピーカーに繋がっている。肉体と意識とを繋ぐ命綱を頼りにたった一人で『潜航』するXの感覚を受け取ることで、私たちは『異界』を知る。

——かくして、今日の『潜航』が、始まる。

「不思議な、アシカ、でしたね」

「あれはアザラシというのよ、X」

「アザラシ……？」

「そう」

「アザラシとアシカって、違うんですか？」

「随分と初歩的な質問が来たわね」

「確か、フクロウとミミズクは、生物的には、どちらもフクロウだとか、なんとか。ワシとタカも、大きさの違いではないのか。そういうもの、では、ないんですか」

「それは知ってるのね。あなたって、何を知って何を知らないのか、全然わからないわね……」

「アザラシの見分け方は、教わったことが、なかった、ので」

「そんなに難しくないわよ。ぱっと見てわかる部分だけでも、前脚が長くて上体を起

こして陸上を移動できるのがアシカ。前脚

が短くて這って移動するのがアザラシ。前脚の鰭をオールのように使って泳ぐアシカ

に対して、アザラシの前脚は方向を定めるのに使う程度で、後脚の鰭を左右交互に動かして水を掴んで泳ぐの。あとは、耳たぶ

があるのがアシカ、ないのがアザラシね」

「なるほど。鰭があれば、アシカ、というわけでは、ない……」

「つまり、あなたの中ではアザラシもトド

もセイウチも全部アシカだったのね？」

「でも、オットセイは、違う、と思います」

「オットセイはアシカ科だから、アザラシよりはよっぽどアシカに近いわよ」

「……そう、なんですか？」

「私は、あなたの中の分類がどうなってるのが知りたいわ……」

## なんでもない日のXと私

2022-11-05 / 紙本祭4 書き下ろし

シアワセモノマニア  
<https://happymonomania.com/>

青波零也 Aonami Reiya  
[aonami@happymonomania.com](mailto:aonami@happymonomania.com)  
 Twitter: @aonami



無名夜行

Proof of Alice's Existence

迷宮のアザラシ

その『異界』は、一言で表現するならば「迷宮」だった。今までもロールプレイングゲームに登場するような地下迷宮や、『こちら側』の遊園地のアトラクションを思わせる迷路など、様々な『異界』の迷宮に挑んできたXであったが、今回の『異界』は確かに迷宮ながら、具体的に「どういうものか」と問われると説明が難しい。

先ほどまで歩いてきたのは青白い氷壁に覆われた空間だった。その前は草花が生い茂る森で、それより前はビルとビルの隙間に伸びる細い道であった。進むにつれ変化する風景は、この『異界』の全容を掴ませない。

耳を澄ませてみれば、スピーカーからもわずかに奇妙な音が聞こえている。今までの『異界』でX以外の動くものを観測していなかっただけに、つい、こちらの背筋も伸びる。

脚、に意識が及んだ時点でその正体をやっとな理解する。アザラシだ。アザラシの幼獣。ソファの座面の隙間から上半身だけを出したアザラシが、前鰭で座面をべちべち叩きながら、Xを見上げて弱々しい鳴き声をあげている。

たなのか。一体Xの中でどういう区分になっっているのだろう。

とはいえ、見通すことを阻む高い壁に、方向感覚を失わせる複雑な通路という構造は共通している。Xも自分がどこから歩いてきたのかなど、もはや全く把握できていないに違いない。

変哲もないソファに見えるが、座面と座面の隙間で、何かがある。それが何であるのか、すぐには判断がつかなかった。ふわふわの真つ白な毛に覆われた、耳のない丸い頭に、潤んだつぶらな目、犬のようなつやつやした黒い鼻。そして、先端に小さな爪を持つ、鰭の形をした短い前

驚く私と対照的に、Xは淡々と言い放つ。アシカとアザラシの区別ができないのと同じように、このアザラシのおかしさに全く気付いていないのかもしれない。何せ彼はXだ。Xに私の常識は通用しない、ということも今までの試行で散々思い知らされてきたではないか。

アザラシが抗議めいた声をあげる。Xに種類を間違われたのが不服だったのかもしれない。

先ほどの抗議めいた声も、あながち私の思い込みというだけではない。アザラシの言葉無き要請に応え、Xは短い前脚の下に手を差し込んで無造作に持ち上げる。

を蠕動させることでかろうじて陸上を移動する不自由極まりない生物、なわけ……。だが、次の瞬間、私は信じられないものを目にした。

かくしてXはアザラシを置いて一歩を踏み出す。私が与えたタスクに従い、この『異界』の観測を進めるために。

「……出られないんですか？」アザラシはこくこくと頷く。どうやらXの言葉は理解しているらしい。……ということとは、気づいたらしいXが振り向く。

「もう、大丈夫ですね」Xがアザラシを床に下ろす。しかし、水場もない場所にアザラシを放置して問題ないのだろうか。何せアザラシは鰭脚類の中でもアシカほど器用には陸上を動けない。短い前脚は陸上を歩くための役には立たず、全身

「どうか、しましたか」アザラシは前脚を振って、鼻息荒く何かを語りかけてくる。しかしXがアザラシの言葉を解するわけもなく、首を傾げる。「わからないですね。困ったな」すると、アザラシがぐいぐいXの胸に頭を押し付けてくる。

「苦しくない、ですか」見下ろす視界の中で、Xの腕に抱かれたアザラシが嬉しそうに頷く。そのきらきらとした目が何ともほほえましい。「では、行きますよ」Xは声をかけて歩き出す。待合室らしき空間を抜ければ、今度は黒い壁の上の色とりどりの光の走る通路に出た。まだまだ迷宮は続きそうだ——と思ったところで、「ああ、そうそう」とXがアザラシを見下ろす。

「……出られないんですか？」アザラシはこくこくと頷く。どうやらXの言葉は理解しているらしい。……ということとは、気づいたらしいXが振り向く。

見つめる。やがて、何とかXの側まで歩んできたアザラシが、Xを見上げた。潤んだ眼で、何かを必死に訴えかけている。

「連れて行け、と？」アザラシがぱつと顔を輝かせた。どうやら正解らしい。このアザラシがどこから来て、どうしてソファに嵌っていたのかはわからないが、あの歩幅では部屋を出るだけでも一苦労だ。人並みの歩幅を持つXに頼りたくなるのも、理解はできる。

「私は迷子なので、出口にたどり着けるかは、わかりませんよ」放たれた言葉に、アザラシが「えっ」という顔をした。

「……出られないんですか？」アザラシはこくこくと頷く。どうやらXの言葉は理解しているらしい。……ということとは、気づいたらしいXが振り向く。

「どうか、しましたか」アザラシは前脚を振って、鼻息荒く何かを語りかけてくる。しかしXがアザラシの言葉を解するわけもなく、首を傾げる。「わからないですね。困ったな」すると、アザラシがぐいぐいXの胸に頭を押し付けてくる。

「……出られないんですか？」アザラシはこくこくと頷く。どうやらXの言葉は理解しているらしい。……ということとは、気づいたらしいXが振り向く。

「……出られないんですか？」アザラシはこくこくと頷く。どうやらXの言葉は理解しているらしい。……ということとは、気づいたらしいXが振り向く。

「……出られないんですか？」アザラシはこくこくと頷く。どうやらXの言葉は理解しているらしい。……ということとは、気づいたらしいXが振り向く。

「……出られないんですか？」アザラシはこくこくと頷く。どうやらXの言葉は理解しているらしい。……ということとは、気づいたらしいXが振り向く。

「……出られないんですか？」アザラシはこくこくと頷く。どうやらXの言葉は理解しているらしい。……ということとは、気づいたらしいXが振り向く。

「……出られないんですか？」アザラシはこくこくと頷く。どうやらXの言葉は理解しているらしい。……ということとは、気づいたらしいXが振り向く。